
土御門君の除霊日記

ようぜん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

土御門君の除霊日記

【Nコード】

N7921C

【作者名】

よっぜん

【あらすじ】

安倍清明の子孫である土御門泰祐が色々と笑いを交えつつ除霊する物語です

其の壱（前書き）

蒼紅が若干滞り気味なのでちょいと間を開けて他の短いものを書いてみようかと思ひまして書きました。三万文字程度で完結の予定です。どうかお付き合いいただければ幸いです。

其の壱

今日も清々しい朝だね。うん、実に気分がいい。こんな日は二度寝をしたい気分には駆られるね。まあ学校があるからそうもいかないけど。

っと、自己紹介が遅れたね。僕の名前は土御門泰祐^{つちみかどたいすけ}。篠塚高校に通う高校二年だ。だけど生憎僕は普通の高校生じゃないんだよね。名字からわかる人もいるだろうけど、僕の家は平安時代に活躍したあの有名な安倍清明の子孫なんだ。だから僕はその当主跡取りつてわけだ。うゝん…一通り説明したらまた眠くなってきたね。このまま寝ちゃおうかな。学校には午後から行けばいいか。そんなことを考えていると母屋と離れをつなぐ廊下からドタドタと騒がしい音が聞こえてくる。

「泰祐、起きろ」

そう言って入ってきたのは俺と同じくらいの年の女の子。ぶつちやけ美少女としか言いようのない整った顔に、腰まで届く長い髪はなんと真っ白。でも幼馴染とかじゃあない。というか人間ですらない。

こいつは葛葉っていうやつなんだけど、正体は化け狐。なんでも僕のご先祖様が代々の当主跡取りの面倒を見て立派な当主にしてやれとか言ったらしくて、当主跡取りである僕の面倒を見ているわけ。ちなみに変化を解いて狐の姿に戻ると白狐になる。だから髪が白いんだってさ。ま、それはいいとしてそろそろ起きないとホントに遅刻するね。

ゆっくりとした動作で起き上がる僕。起き上がって向かうのは洗

面所。顔を洗って眠気を醒まないと朝食を食べてるときに寝ちやいそうだ。

顔を洗ったら居間へと向かう。そこには既に朝食を食べている父さんと母さんの姿があった。

「あら、おはよう。早くご飯食べなさい」

ゆったりとした感じの母さんはいつもニコニコしている。まあ能天気なことだね。父さんは挨拶ナシで黙々と朝食を食べている。息子に挨拶もないのかよ！いつも思うが今ではこれがデフォルトなので気にしないことにしている。僕は挨拶もそこそこに椅子に腰掛け朝食を食べ始める。

なぜか僕の家族は朝食の際に会話をしない。そのため朝はいつも皆無言だった。でも仲が悪いつて訳じゃあない。単純に僕を含めた家族全員が社交性に乏しいからっただけなんだ。

しかもこの家の住人で一番社交性があるのは人間でない葛葉なんだよね。困ったものだけどこれもどうしようもないから妥協するでしょう。

そうして朝食を食べているとガタガタと家が少し揺れ始めた。いや、地震でもなくて、かといって家がボロい訳でもなくて…単純に家を揺らしている奴がいるだけなんだよね。

…うるさいからやめさせるかな。

「おゝい、鳴家^{やな}、飯はやるから静かにしてくれ」

そう呼びかけると揺れは収まり、その代わりに小さな三十センチほどの大きさの小鬼が何匹も現われた。柱が揺れる音を真似ている

らしく、きいきいと鳴いている。

こいつらは鳴家と言って人家に住み着いて家や物を揺らしたりしてポルターガイストまがいの現象を起こす妖怪たちだ。でもそれしかしないし、正体わかってれば怖くないし、意外に人懐っこくて可愛いんだよねこれが。まあそんなわけで出てきた鳴家たちにご飯を分けてやると我先にとばかり仲間内で取り合うのを見ているのは何となく微笑ましい。

と、そろそろ学校に行かないと遅刻になってしまっうね。未だ争奪戦を繰り広げている鳴家を放置して自室へと戻る。

部屋に戻るとすぐに着替えを済ませ、玄関へと急ぐ。二十秒後、玄関にたどり着くと葛葉がいた。多分見送りだろう。珍しいこともあるものだね。いつもなら僕の部屋で漫画でも読んでるのに。

「や、葛葉。行ってくるよ」

につこり笑って葛葉に言った。だが葛葉は心なしか不安げな表情をしていた。

「気をつけて。今日あんた結構不幸な目にあうかもよ」

それを聞いて僕は固まる。以前も葛葉にこんな忠告をもらったことがあるけどその日はひどい目にあった記憶しかない。葛葉の忠告だからまず外れないだろうし…どうしたものかね。

と、ここで考えていてもしょうがないから取り合えず学校に行くとうか。そろそろ走らないと間に合わなくなるからね。葛葉に挨拶を済ませ勢いよく玄関を飛び出した。

走りながら腕時計に目を向ける。時間は現在八時。家から学校ま

では約三十分、予鈴は二十五分だから…うん、少し急げば何とかなりそうだね。そうと分かればこんなに急ぐ必要は無いと思い、少し走る速度を緩める。

今現在はHRの後の授業の準備時間。結論から言うと結局間に合わず遅刻したと言っておこうか。理由は簡単、いつも通学に使ってる道が工事中で塞がってたんだ。だから回り道をしたわけなんだけど…でもただでさえ時間結構ギリギリだったのを回り道したりしたら遅刻するのは当然というか…まあともかく葛葉の言った通り早速不幸な目にあつたわけだ。

「また遅刻か？程々にしとけよ」

そう僕に声を掛けてきたのはクラスメイトであり数少ない友人の一人でもある上遠野遼平だ。かどのりょうへい薄い茶色の髪で顔は男の僕から見てもかなりいい。彼とは高校に入ってから知り合ったけど、知り合っ一緒に行動するようになってから実に二桁に届く数の告白をされており、色々とうらやましい存在でもある。

「今日はやむを得ない事情があつたんだよ。仕方なかったんだ」
「おまえのやむを得ない事情なんてのはあてにならないさ」

遼平は間髪いれずに返してくる。そんなに僕の言葉が信用できないとは…困ったものだね。
さて、それはいいとしてそろそろ授業が始まるね。教科書を準備しないと…

教科書とノートを机の上に広げて教師が来るのを待つ。やがて教師が来て号令と共に授業が始まる。授業の内容は寝ていたから分からないけどね。

午前の授業をすべて寝て過ごした僕は四限の終了のチャイムと共に目を覚まし、いそいそと教科書をしまうと、購買へと走った。パンをいくつか買って教室に戻り、遼平と一緒に昼食をとる。
しばらく二人で昼食を食べていると遼平がはなしかけてきた。

「なあ、知ってるか？」

「？ 何を？」

何となく気になったので聞き返してみる。

「聞いた話なんだけど、最近学校で女の幽霊みたいなのが目撃されてるんだとさ」

幽霊、と聞いて僕は当然のごとくその話題に食いついた。

「その話、詳しく聞かせてよ」

「お、やっぱり食いついたか。おまえはこういうネタによく食いつくよな」

そりゃあ家がそれ関係だからね。興味も持つき。と頭の中では思いつつも思っているのとは違う言葉を返す。

「そついうのって結構面白いのが多いから好きなんだ」

僕は笑いながら答える。だけどそこに長い付き合いの遼平は僕が本当のことを言っていないことを看破していたようで、本音を言うように迫ってきた。だけど僕は本当のことは言わないで誤魔化すだけだった。本当のことを言わないのにもそれなりに理由があるけど、まあそれを言ったら本末転倒だし誤魔化すしかなかったんだよね。以前それで結構後悔したこともあることだし、ね。

「わあつたよ。もう訊かねえよ。一度言わないと決めたら絶対に言わない頑固な奴だからなおまえは」

遼平は半ば呆れ気味にため息をつきながらも追求するのをやめてくれた。うん、やっぱり遼平はいいやつだね。こんな性格だからこそ遼平はモテるのだろうと思った。当然顔も含まれるだろうけど。

「さすが。よくわかってるね。それじゃ、さっきの話の続きを聞かせてよ」

僕は顔に作り物の笑顔を浮かべながら先を促した。遼平とも言っても僕は多少の距離を置いて接している。基本的に家族以外の人間とは腹を割って話すことはない。家族以外で本音で喋ってるのは葛葉や鳴家たちなどで人間ではない。これまた理由があるんだけど愉快的な話じゃないんで割愛しておこう。

「あいよ、ま、そんな長い話でもないんだが…放課後に部活帰りの奴らが何人か見たらしいんだけど、体育館の更衣室で見たってのが一番多いな。次に中庭だったかな。なんでそんなところで目撃されるんだか知らんが、見た奴の話ではなんかずつと誰かの名前を呼び

ながら漂っているんだそうだ。んでこっちに気付くと近づいてきてこう言うんだ。『経若丸を知らぬかえ?』ってさ」

経若丸…どこかで聞いたことのある名前だがどこで聞いたのかは思い出せず僕は記憶を探るように考え込んだ。黙ってしまった僕をみて遼平は僕が何か知っていると思ったよう興味深げに訊いてきた。

「ん?何か心当たりあるのか?教えてくれよ」

「うゝん、どこかで聞いたことはあるんだけど思い出せないんだ。ちよっと調べてみるから何か分かったら教えるよ」

そう言うた遼平は少し残念そうな顔をしたがすぐに気を取り直したよういつもの表情に戻った。

「そうか…まあ何か分かったら教えてくれ」

その後は昼休みが終わるまで遼平と他愛ない話を過ごして過ごした。昼休みの後の午後の授業を全て寝てやり過ごすと僕はすぐに鞆を持って教室を飛び出した。今日遼平から聞いた話のことについて調べるためだ。正直経若丸というのが気になって仕方がなかった。葛葉から聞かされたことがあったような気がするが、どうにも思い出せなかった。

帰り道を小走りに走っていると後ろから声を掛けられた。振り向くとそこには僕と同じ学校の制服を着た女の子が立っていた。セミロングの黒髪を後ろで束ねている。いわゆるポニーテールと言う髪型だ。身長は僕より拳一つ分ほど低いので見上げる形になっている。

「ん?なんだ舞衣か。何か用かい?」

この女の子は渡辺舞衣。^{わたなへまい}僕と中学から付き合いの続いている珍しい人間の一人だ。というか中学からまだ付き合いのあるのはもう舞衣だけなんだけど。とんだ腐れ縁もあったものだと思う。

「別に特に用事はないよ。何となく急いでるな〜ってのがあったから声掛けてみただけ」

うん、こいつは実に性悪だね。急いでるって分かるくせにわざわざ声を掛けるなんて…まあ今に始まったことじゃないんだけどこれはこれで鬱陶しいなあ。

「そうかい…用事がないなら僕はもう行くよ。僕は舞衣みたいに暇じゃないからね」

そういつて僕は舞衣に背を向けて歩き始めた。すると舞衣は慌てたようにそれを引き止めてきた。

「あ、待つてよ。用事がないって言うのは嘘。冗談だから。ちゃんと用事はあるよ」

用がある、と言われては聞かないわけにはいけないので立ち止まって舞衣の方を向く。

「用って何？急いでるから早くしてくれよ」

僅かに苛立ちを含んだ声色で言うつと舞衣はごめんごめんと謝りながら話し始めた。

「単刀直入に聞くけど今回の幽霊の話は知ってる？」

その質問で僕は大体の事情を理解した。舞衣はなぜかは知らないけど幽霊や妖怪などのオカルト的なものが大好きという変わった趣味を持っている。だからそういったものに詳しい僕のところに来れば何か分かると思ったのだろう。何で僕がそういうのに詳しいのかを知っているのは中学の時に起こった似たような幽霊騒動が関係してるんだけど今は関係ないからこれも割愛しておこうか。

「詳しいことは知らないけど表面的なことはぐらいは知ってるよ。今それについて調べようと思ってたところなんだ」

「じゃああたしも付いてく」
「却下するよ」

僕は間髪入れずに答える。すると舞衣は予想通り不満そうな顔をしている。だけど僕は他人を家に上げるつもりはないし、調べ物をするのも一人の方がいい。いざとなったら葛葉に手伝ってもらえば良いしね。正直なところ舞衣がいても邪魔なだけだ。

「却下したって勝手に付いてくよ」

舞衣は不機嫌な顔をしながら中々鬱陶しいことを言ってくる。あの顔は誰がなんと言おうが付いてくると言う顔だ。僕はため息をつきながらだめもとで説得を試みてみた。

「駄目なものは駄目なんだから諦めてくれ」
「やだ」

即答したね。困ったものだ…予想してた返事とはいえ、ここまで即答されるとなあ。

しょうがない、撒いてしまおうかな。

僕は突如舞衣に背を向けて走り出す。舞衣よりは僕の方が足が速いから先に走り出してしまえば舞衣は追いつくことは出来ないから逃げ切れるだろう。幸い舞衣は…というかクラスメイトは誰も僕の家を知らないから撒いてしまえばこっちのものだ。

僕は角をいくつか曲がり、後ろを見て舞衣の姿がないことを確認すると走るのを止め歩いて家を目指す。さて、早く家に持って調べないかね。

~~~~~

はあ…はあ…逃げられた…。何なのあいつ！いつつもそう！中学のときもああいう風に逃げられて…ああもう！腹立つ！！

あたし、舞衣は泰祐に逃げられたことに非常に腹を立てていた。あいつは一度逃がしたらその日のうちに捕まえる事が出来たためしは無い。おそらく家に戻ったらもう外に出ないからだろうが、その肝心の家の場所をあたしは知らないで家まで殴りこむ、ということが出来ない。家の場所を知っていればとくに殴りこんで無理矢理泰祐から聞きだすが、あいつの家を突き止めようと尾行すると必ず気付いて撒かれてしまう。一体どうやって感知しているのか気になるところではあるが、そのせいで未だ泰祐の家の場所を知ることが出来ないでいた。

撒かれた後も周囲を歩き回って泰祐の姿を探すが当然のごとく見

つからない。あたしは諦めて家に帰ろうと思い軽く意気消沈して肩を落しながら帰っていると、ふと、学校に忘れ物をしたことに気付いた。面倒だなあと思いつつも今日学校から出された課題をやるのに必要なので取りに行こう。

あたしは学校へと歩く方向を変えると少々急ぎながら学校への道のりを辿っていった。

其の弐（前書き）

更新遅れてすいません

## 其の貳

きよろきよと周りを窺いながら舞衣が追いかけてこないことを確認するとほつと胸をなでおろし、歩調を緩め家路へとつく。

「やれやれ、やっと撒いたかな」

正直に言えばこういったことは今回が初めてじゃない。中学のときも幽霊騒ぎとかになると必ず僕のところに来てたんだよね。基本的には僕の家のことを何も知らないはずなのに僕がそういったものに関わりがあると睨んだその観察眼は凄いと思う。個人的な心情としては迷惑なだけなんだけどね。

さて、こうして一旦撒いてしまえば絶対に僕の家まで追いかけてくることはない。いや、できないと言った方が正しいかな。僕の家は普通に歩いただけじゃたどり着けないようになってる。普通の人間は方違えという特殊な方法を取らないと僕の家にはたどり着けない。方違えって言うのは目的地に向かう際に一旦別の場所に行つてから再度目的地を目指すことだ。だから僕の家に来ようと思つても来れないわけだ。ちなみに僕と同じような家柄の人間で多少の能力があれば方違えをしなくても僕の家に来ることが出来る。まあ、そんなのはこの辺にはいないと思うけどね。

そんなこんなでいつのまにやらもう家の前についていた。玄関の鍵を開け中に入る。

「ただいま」

そついうと居間の方から気だるそうな声で葛葉のおかえりと言う声が聞こえてきた。それに続いてきいきいと言う鳴家の声も聞こえ

てくる。

「あれ？父さんたちは？」

居間に行くと父さんたちの姿がなかったので葛葉に尋ねてみる。

「仕事で出張だよ。聞いてなかったの？」

もちろん聞いていない。うーん…それって今仕事きたら僕が受けなきゃいけないんだよね。面倒だな…。はあ、と僕はため息をついた。

「いつごろ帰ってくるか分かるかい葛葉？」

「聞いてないね。でも仕事のおおよその内容は聞いてるよ。確か…水無瀬にある鬼塚が暴かれてその骨が持ち去られたとか何とか…うん、そんなようなことを言ってたと思う」

水無瀬…水無瀬と言うと今の鬼無里の事を指す。鬼無里にある鬼塚…ああ、思い出した。

「それって鬼無里に伝わる鬼女の首塚のこと？」

そう問いかけると葛葉は首を縦に振りそれを肯定した。それを聞いて僕は何か引つかるものがあった。何か重大なことを忘れている気がする。だがそれがなんなのか分からずもやもやしたもののだけが残った。まあいいや、そのうち思い出すだろう。

「葛葉、僕はちょっと調べ物をしてくるよ」

そう葛葉に言い残すと庭にある土蔵へと向かう。家の土蔵は代々

の当主が集めた古今東西の霊や妖怪に関する本が保管されている。そのため現在ではこの土蔵は書庫として使われている。ここで今日遼平が言っていた霊について調べる積もりだった。経若丸、という古風な名前の人物の名を呼んでいるらしいからそれなりに古い霊だろう。もしかしたらここに何か手がかりがあるかもしれない。土蔵のなかはかなり広く、軽く見積もっても蔵書量は千や二千では済まなそうだった。僕はため息をつきながら近くの本棚に近寄り、一冊ずつ内容を確認していく。

葛葉が夕飯が出来たと呼びに来るまで調べ続けたが結局手がかりは見つからなかった。あれだけの蔵書の中からピンポイントに関係する書物を見つけるのは並のことじゃない。せめて五十音順とかになつてたりしてくれてたら幾分マシだったかもしれないけど。さすがにそんなに都合よくは行かないね。

居間で葛葉と二人で夕飯を食べていると葛葉が土蔵で土蔵で何を調べていたのかを尋ねてきた。

「ああ、それはね、なんか最近学校で女の幽霊が目撃されるみたいなんだ。話を聞くとなんか古そうな感じの霊だったから家になんか手がかりでもあるかなって思ったんだけど…本の量が半端ないからいくら調べても全然かすりもしないんだ」

それを聞くと葛葉は少し真剣な顔になってさらに訊いてくる。

「泰祐、あんたがその霊を古いつて判断したのはどうして？」

「…どうも友人からの話だとその女の霊が『経若丸』って名前を呼び続けてるらしいんだ。だから名前からして古い印象を受けたんだよ」

それを聞くと葛葉は考え込むようにして黙ってしまった。どうしたのかと思い、訊いてみても返事は返ってこない。思考に集中しているようだった。僕は葛葉の思考が纏まるまで待つことにした。

……十分ほど経つてようやく葛葉が口を開いた。

「まずいわね…その霊、多分紅葉よ」

紅葉、ときいて僕は固まってしまった。開いた口が塞がらないと言つか、とにかく紅葉と言う霊は分類上はもう霊ではなく鬼に分類されるほど強い霊だ。そんなのが暴れたしたらとんでもないことになる。…でもなんで紅葉がここにいるんだ？確か紅葉は退治されて封印されたはずだったと思うんだけど…

疑問に思ったのでそれを葛葉に尋ねてみる。だが葛葉から返ってきたのは返事ではなく呆れたと言う眼差しだけだった。なんか変なこと聞いたかな？

「あんた馬鹿？それでも当主跡取りなわけ！？次期当主がそんなことも知らないでどうすんのよー！」

そして葛葉は凄じ剣幕で怒鳴りつけてくる。そんなに怒られても知らないものは知らないんだからしょうがないじゃないか、と口に出して言えるわけもなく、心の中で言う僕。うーん、僕って小心者だなあ。怒鳴り声を聞いた鳴家達もびっくりしてきいきい鳴いている。

「じゃあ教えてよ葛葉。なんで紅葉がここきてるのさ？」

葛葉は怒鳴った後で息が上がっていたため呼吸を整えてから話し始めた。

「今当主が仕事でいつている場所があるでしょ？水無瀬つてとこ。そこで鬼塚が暴かれたって言ったじゃない。紅葉はね、その水無瀬の鬼塚に封印されていたのよ。それを暴いて誰かが持ち去った。それで紅葉がここにいる。だったら答えは一つしかないじゃない」

葛葉はそこで言葉を切ると僕を見た。その答えを言えと言つことらしい。

「つまり…持ち去られた紅葉の遺骨が学校にあるってこと？」

そついうと葛葉は満足そうに頷いた。そこで僕は先程の引っ掛かりが解けた。経若丸って言うのは紅葉の子供の名前だ。紅葉って聞いたときに引っかけたものがようやく解けた。思い出せそうで思い出せなかったからややもやしてたんだね。

「そついうこと。だからあんたは学校で紅葉の骨を捜してきなさい」

それを聞いて僕は啞然とする。今から行けと言つのだろうか。いや、そうなのだろう。葛葉の表情がそれを雄弁に語っている。どうやら行くしかなさそうだ。いやだなどと言おうものならその瞬間何をされるか分かったもんじゃない。

「わかったよ。行ってくる。あと玄象連れて行ってもいい？」

玄象と言うのはこの家にいる付喪神のうちの一人だ。琵琶の付喪

神でうちにいる付喪神の中では一番の古株でもある。

「いいけど…あんな年寄り連れてどうしようっての？…ってああ、そういうことか。ならいいよ。連れて行きなよ」

葛葉の了承も得たので僕は自分の部屋へと行き玄象を取りに行く。部屋の隅に立てかけてある琵琶は一見すると普通の琵琶だが、その実は長い年月を経て付喪神となったものだ。この琵琶、玄象は怠惰な性格をしていて、基本的にいつも眠っている。なので普段は普通の琵琶となんら変わらない。

「おい、玄象、起きてくれるかい？出かけるんだけどちょっと付いてきて欲しいんだ」

…玄象はぴくりとも動かない。こいつは普段から寝てるからちよつとやそつとのことじゃ目を覚まさないんだよね。起こすのめんどそうだなあ。でも起こさないといけないし、しょうがないけどいつもの方法で起こすかな。

僕は玄象を掴んで弾き始める。すると玄象はもぞもぞと動いて僕の手の上から逃げ出した。

「なんじゃい。わしゃ気持ちよく寝とったんじゃ。寝かせとくれ」

「玄象はいつも寝てるだろ。少し位起きて僕の用事に付き合ってくれ」

「仕方がないのう。次期当主の頼みじゃから断れんし」

そういつて玄象は付いて来ることを承諾してくれた。僕は玄象を布で包むと背負って玄関へと向かった。

「悪いね。今度手入れをしてあげるから許してくれ」

外に出ると陽はすっかり落ちて、沢山の星と、青白い月が僕を見下ろしていた。月の光を背に受けながら僕は夜の学校へと向かった。

## 其の貳（後書き）

テスト期間＋修学旅行のコンボが控えているのでしばらく更新できないです。蒼紅は修学旅行から帰ってきたら更新しますのでしばらくお待ちいただきます。

其の参(前書き)

更新遅れました。

## 其の参

辺りを見るともう完全に陽は落ちて暗闇が空を覆っていた。あたし、舞衣は忘れ物を取りに来たついでに例の幽霊騒ぎの元である幽霊を一目見ようと校内を歩き回っていた。結構な時間をかけて探し回ったが、何の収穫も得ることが出来ず、肩を落しながら今日は諦めて帰ろうと校門へと足を向けた。

すると、何かを背負った人影が門に近づいてくるのが見えた。この暗い中ではもつと近づかないと顔は見えない。私はとっさに門の脇に隠れてその人影が近づいてくるのを待った。その人影が近づいてくるにつれてなにやら話し声が聞こえてくる。一人なのに話し声が聞こえてくるのでなんだろうと思ひ、耳を澄ましてみる。

「なんで今日なんだか…別に明日でもいいと思うんだけどね」

「愚痴を言っても始まらんぞい。文句を言っている暇があったらさっさと仕事を終わらせるんじゃない」

その声を聞いてあたしは驚いた。話している声の片方に聞き覚えがあったからだ。その聞き覚えのある声は間違ひなく泰祐の声だった。でもここでふと疑問が浮かんた。人影は一人分しかない。それなのに声は二人分聞こえてくる。

あたしは背筋が寒くなつた。でもそれと同時にいつも謎だらけの泰祐の正体がかかるかもしれない、と言う思いもあった。あいつは中学のときから知っているけどいつも一人でいて他人と関わろうとしなかった。そのくせ幽霊とかの騒ぎにはすごく敏感で、騒ぎが起こると今まで他人と関わろうとしなかったのが嘘みたいにいるんな人に聞き込みをしたりしてた。でも騒ぎが収まるとまたずっと一人でいるようになってた。あたしから話しかけても消極的な感じですぐに会話が途切れて続かなかった。それでも根気良く話しかけて

ると今度はあたしが近づくと逃げるようになった。さすがに腹が立ったから待ち伏せしてあいつの首根っこ引っ搦んで尋問したけどなんか上手いこと言って誤魔化されたし、ああもう思い出すと腹が立つてくる。

あたしは思考を切り替えて前方の人影に意識を戻した。だいぶ距離が近くなったので泰祐の顔ははっきり見えた。ついでにその背中にあるものも確認することが出来た。楽器のようだが正面からでは全体像が分からないのでなんの楽器かはわからなかった。

泰祐は門まで着くとため息をつきながらめんどくさいとぼやいて歩いていった。あたしには気付かなかったようだから後を付けてみようと思う。これで泰祐の正体が分かるかもしれないと思うとワクワクが止まらなかった。絶対あいつの正体を暴いてやる、と言う意気込みと共にあたしは泰祐の後を付け始めた。

~~~~~

僕は玄象を背負いながら校内をうろついていた。傍から見たら怪しさ満点だと我ながら思う。まあ別に見てる人がいるわけじゃないから妥協するのだろうか。

さて、どこから調べようか…遼平は良く目撃されるのは中庭と更衣室だつて言ってたっけ。まずは中庭から調べてみようと思い、校舎の脇を通って中庭へと向かう。その折、背後から視線を感じたような気がして、振り返ってみる。なにもいないなあ…気のせいかな。僕はそのまま中庭へと足を踏み入れた。

中庭は当然誰もおらず、昼休みなどにいつも沢山の生徒で賑わっているのが嘘のようだった。中庭には大きな桜の木が真ん中に立っていて、6月という季節に応じた青々とした葉を茂らせていた。夜の学校で見る6月の桜も中々に乙だなあと思いつつ、何か手がかりがないか探し始める。

…全然見つからないね、うん。更衣室の方も調べて見たけど特に何もなかったし、どうしたものかと途方に暮れて桜の木の下に腰を下ろしていると中庭の隅で何かの気配を感じたので、そちらに目を向けてみる。そこには…紅葉がいた。彼女は僕に気付くと音もなく僕に近寄って来て遼平が言っていたのと同じことを尋ねてきた。

『経若丸を知らぬかえ？』

「経若丸はここにはいないよ…紅葉」

そう答えると紅葉は初めてまともに受け答えをした相手に面食らったのか、経若丸がここにいないと言われたことにショックを受けたのか…おそらく後者だと思うけど呆然とした表情でしばらくの間紅葉は微動だにしなかった。

『なぜじゃ！なぜ経若丸がわらわの傍におらぬのじゃ！』

突然紅葉はものすごい剣幕で怒鳴った。そのときに後ろの方で小さかったけど悲鳴のようなものが聞こえた。紅葉と僕しかいないはずの空間でそれ以外の声がすると言うのは総じて異端だ。この場にいるのは僕達だけのはず。にもかかわらず他の人間の悲鳴が聞こえるとするれば考えられることは一つだ。

「誰かな？出ておいでよ。そこにいるのは——」

僕は声のした方に声を掛けようとした。けど、それより早く紅葉が声が聞こえた方に向かって行ったんだ。

『その女子おなこや、経若丸を知らぬかえ？』

そこにいたのは舞衣だった。舞衣は目の前の紅葉と目を合わせた途端になぜかすくみあがっていた。と言うかこのまま紅葉が舞衣に関心を持つてるとまずそうだね。紅葉の意識をこっちに向けないと…

『女子や、そなたの名はなんと申すのじゃ？』

まずい——そう思った僕は紅葉と舞衣の間に割って入ろうとする。すると紅葉は一瞬だけこっちを見て短く呟いた。

『動くな』

その瞬間、僕は氷のように固まり動けなくなってしまう。

さすが紅葉だなあ…『名』で縛らなくても言霊だけでここまで効果を持っなんてね…でも動けないと舞衣がまずいことになる！

『さて、これで邪魔者ものうなった。女子や、名はなんと申す？』

紅葉の言葉には強制力がある。ただの一般人である舞衣には言霊に対抗するすべを持ち合わせてない。今ならまだ間に合うけどこのまま名を教えるとそれはどんな言霊にも勝る『呪』になってしまう。そつなると名で縛る『呪』に対抗するには並大抵のことじゃない。とてもすぐには解呪出来なくなる。どうにかしないと——

「舞衣…です」

「ただ僕と言霊に縛られて何も出来ずに舞衣が紅葉に名前を教えるのを許してしまう。」

紅葉は舞衣の名前を聞くと愉悦を抑えきれないように唇の端を歪めた。

「舞衣か、よい名じやのう。では舞衣よ。そなたに頼みがあるのじや。聞いてくれるかのう？」

「…はい」

それに対して舞衣は虚ろな目で答えた。すで『呪』によって意識を奪われているようだった。ただ紅葉は舞衣を『呪』で縛って何を強制するつもりなんだろう？

『わらわの頼みはのう、そなたの肉体を借りることよ』
からだ

其の参（後書き）

これから姉が卒論を書くそうなのでしばらく更新できないかもです。
合間を縫って書くつもりですが、更新ペースは落ちると思います。
ご容赦ください

其の四（前書き）

少々短めです

其の四

紅葉が舞衣に触れようとした瞬間、静かな音色が辺りに響いた。

裏：裏

その瞬間僕にかかっていた呪が解ける。玄象の音色には邪を弾く力がある。だが舞衣は紅葉の目の前にいるので効果か薄いようだった。すかさず僕は九字を切って小さく呪を唱える。舞衣を術から解くためだ。

舞衣は意識を取り戻すと目の前の紅葉に驚いて悲鳴を上げてへたり込んでいた。

すると紅葉が僕の方を、いや、僕の背負っている玄象へと視線を向けた。その顔は鬼のような形相で殺気を振りまいていた。

『ああ、口惜しや。玄象かえ。よくもわらわの邪魔を…その身を砕いてくりようか…それとも八つ裂きにしてくりようか』

恨めしそうに呟きながら紅葉こちらへと近づいてくる。うゝん…ちよつとまずそんな気がするね。

僕はズボンのポケットから小さな紙で出来た人型をとりだす。それを地面において呪を唱える。すると人型はそこにはなく、ひとえもの単物を着た一人の女性が静かに佇んでいた。

「雛菊、しばらく紅葉の足止めを頼めるかい？」

雛菊は上品な仕草で頷くと紅葉と向かいあった。僕はその間に腰を抜かしている舞衣へと駆け寄り、抱きかかえるとその場を足早に

去った。

門のところまで来ると舞衣を降ろして後ろを振り返る。とりあえず追いかけてきている様子はなかった。きつと雛菊が上手く足止めをしてくれたんだろーね。ちなみに彼女は人ではなく僕の式神だ。僕は式神に世話をさせる習慣はないからあまり使わないけど、必要になれば当然使う。

『危ないところじゃったのう。ほっほっ』

背中から玄象が声を掛けてくる。確かに今のは結構危なかったね。玄象がいなかったらどうなってたか…

「そうだね。助かったよ。ありがとう。玄象」

僕は玄象に礼を言うと、横で目をぱちくりさせて状況の飲み込めてない舞衣へと向き直る。さてこの状況をどう説明したらいいものか…困ったものだね。一般人に説明するのは相当骨が折れそうだしはあ…

「あゝえっと…舞衣？その、なんて言うかな…大丈夫かい？」

そう言うのと舞衣はジト目で僕を見つめてくる。その目は今までの出来事について説明しろと無言で語っていた。まあそうするのはいいんだけど、どこから説明したらいいんだろーなあ…めんどくさいから説明したくないって言うのが本音なんだけど…

「説明して」

僕が何も言わないことに業を煮やしたのか舞衣はストレートに自分の要求だけを告げてきた。

「僕も説明したいのはやまやまんだけど、何も知らない君にーから説明するのは正直なところ面倒なんだ。だから素直に諦めてここは帰らな——」

「却下。説明しなさい」

”説明して”から”説明しなさい”の命令形になってるよ…これは説明しないと納得しそうにないなあ。でも面倒なんで適当に言うてはぐらかしておこうか。

「簡潔に説明すると目の錯覚だよ」

無言で拳が飛んできたのでそれを避ける。

「じゃあさつき喋ってたあんたの後ろの楽器はなんなのよ」

舞衣は問い詰めるような口調で言うてくる。

「空耳だよ」

間髪いれずに答えると舞衣の額にぴきつと言う音と共に青筋が浮かんだ。…そろそろ限界かな。話さないと本気で怒りそうだ。舞衣は怒らせると後で面倒なんだよなあ。

「わかった、わかったよ。ちゃんと話すから落ち着いて。ここじゃ立ち話もなんだから僕の家に移そう。話しはそこですよ」

ため息をつきつつそう言つと舞衣はようやく怒りを静めてくれたようだった。

「…ホントに話してくれるのね？」

それでも舞衣はまだ疑わしそうにしていた。僕って信用ないなあ。僕は頷くと舞衣についてくるように促して歩き出した。

「僕を見失わないようにね」

そう言うつと舞衣は怪訝な顔をしてなぜかと尋ねてきた。

「それは、僕の家には家の者以外は方違えを三回しないと来れないようになつてゐるからだよ」

「方違えって何？」

やつぱりそういうところから説明しないといけないんだね…

心の中でため息をつきながら方違えについての説明を始める。

「方違えって言うのは縁起が悪い方角に行くときにその方角に行くことを避けて、迂回して他の場所で一泊してから目的地へと向かうことだよ。僕の家には方角を歪める特殊な結界が張つてあるからどんな場所からでも方角の禁忌になるんだ。だから普通には僕の家には来れないんだよ」

「へえ…でもなんでそんなことしないと泰祐の家に行けないようになつてゐるの？」

「…その説明は面倒だからまた今度ということだ」

それを説明するには家の歴史やらなんやら説明しないとイケないんだよね。長くなるからいやなんだよなあ。

「じゃあ泰祐の家に着いたら教えなさいよね」

「今回のことには関係ないからそのことについては却下させてもら

「よ」

というより僕自身うる覚えなだけでちゃんと説明できるか自信がないというのが本音だったりする。なんだか家の歴史とか教えられてたときっていつも眠かったしね。まあ仕方ないことだと妥協しておこう。

「…ならさっきのことについてはちゃんと説明してくれるのよね？」

少々不満そうな目で僕を見ながら舞衣は言ってくる。

「訊かれたことには答えるよ。だけど訊かれたこと以上のことは話さないから今のうちに質問事項を整理しておくんだね」

そうして会話を続けていると周囲はいつの間にもやたら濃い霧に包まれている。方違えの結界の中に入ったようだった。ということはもうすぐ家に着くね。

そんなことを考えていると突然出てきた霧に舞衣が戸惑った表情でこの霧はなんなのかと訊いてくる。

「これが方違えの結界だよ。ここで僕を見失うと帰れなくなるから気をつけて」

この霧は僕が一人で家に戻るときは発生しない。土御門家の人間である僕には結界が作動しないからだ。だけど今は舞衣がいるから結界が作動してそれが霧という形になって現れているわけだね。ご先祖様はずいぶん手の込んだ結界をつくったものだなあ、と感心しつつ僕と舞衣は霧の中を歩き続けた。

そのまま特に会話もなく十分ほど歩き続けるとやがて僕の家が霧

の中から姿を現した。玄関の取っ手に手を掛け、引き戸を開く。

「さ、ここが僕の家だよ。上がってくれ」

僕の後が続いて舞衣も玄関をくぐる。さてこれ、一般人を勝手に家に招いたなんて事を知ったら葛葉怒るだろうなあ、などと考えるつ舞衣を僕の部屋へと案内した。

「適当に座って構わないよ」

舞衣はベッドに腰掛けてこちらを見上げている。早く話せ、と目が語っているね。

「さて、じゃあまずは何かから話そうか――」

其の伍（前書き）

…何と云うかギャルゲーやって二トってましたw
かなりやってましたね。まあ車輪の国は小説を書く上でも参考にな
ったからいいんですが…今度はH2oが出るし、またすぐ更新が止
まる可能性があります。なるべく早く更新します。ではどうぞ

其の伍

「さて、一つずつ説明するのは面倒だから舞衣の方から質問して僕がそれに答えるっていう方式でいいかな？」

泰祐の奴はめんどくさそうにそう言うてくる。だけどあたしは訊きたい事がありすぎてそれが整理できずにいた。だからそんなことを言われてもすぐには質問できない。

あたしが頭の中で何を最初に質問しようか考えていると遠くの方から何かがドタドタと駆けて来る音が聞こえた。なんだろうかとそこらの方に視線を向けると同時に部屋のドアが勢いよく開き、そこから何かが飛び出してきた。それはそのまま一直線に泰祐の方へと向かって行ってそのままの勢いで泰祐を弾き飛ばした。

あたしは呆然としたままその光景を見ていた。何が起こったのか全然分らない。ただ見ている風景は変わっていた。さっきまで泰祐がいた場所に、長い真つ白な髪の子が立っていた。正直見たことがないくらいの美少女だった。

「あんた何一般人普通に家に上げてんの！？馬鹿じゃないの？一般人こんなとこ連れてきたらまずいつてことぐらい分かるでしょうが！あんたそれでも当主跡取りなわけ？」

目の前の美少女はものすごい勢いで壁にぶちあたった泰祐に向かって怒鳴っている。なんとなく清楚っぽいイメージのあった目の前の美少女のイメージはまったくの間違いであると認識させられた。

というかこの美少女は一体誰なのだろうか。いきなり泰祐のこと蹴り飛ばしてたけど…

頭の中でぐるぐると考えていると意識を取り戻した泰祐が恨めしそ

うに呟いた。

「…葛葉、事情も聞かずに蹴り飛ばすのはどうかと思うんだけど…」
「問答無用！天誅！」

葛葉と呼ばれた美少女は聞く耳を持たず、壁にもたれてグロツキ
ー状態の泰祐に向かってさらに追い討ちの上段回し蹴りが炸裂する。

「ぐえっ！」

泰祐は力エルを踏み潰したような声を発しながら顔面に回し蹴り
を受けて更に壁に叩きつけられた。うわぁ、痛そう…ていうかあた
しは完全にスルー？

「あのお〜」

あたしはおそろおそろ目の前の葛葉という美少女に話しかける。
葛葉さんの視線はこちらへと向き、あたしと目が合う。正面から見
るとますます綺麗に見える。日本人の顔立ちをしているのに白髪はくはつに
全くと言っていいほど違和感がない。不思議な感じがした。

「ああ、何かこいつと話してた？だったらごめんね。でもねこの家
には昔から一般人は上げちゃいけないことになってるのよ。あなた
は知らないからしょうがないんだけど、こいつはこの家の人間なん
だから知らないはずはないのよねえ〜」

そう言つて視線を再び泰祐に戻して睨みつける。

「さあ泰祐、何か申し開きはある？あるなら今の内に言いなさい。
今だったら聞いてあげるから」

「それはさつき訊いてくれるとありがたかったんだけど…気にしたら負けだからね、ここは流すでしょうか。んで理由だけど実は――」

泰祐が葛葉さんに事情を説明している間あたしは手持ち無沙汰になり、部屋の中を見渡してみた。特に目立ったものはなく、勉強机、ベッド、テレビなど普通にどこの部屋にでもあるようなものだけ…ではなかった。壁に掛けてある制服の横に見慣れない服がさも当然のようにかかっていた。テレビドラマや映画などで昔の時代のをやっている時に役者の人が着ているのを見たことがある。名前は…思い出せないが平安時代なんかのドラマかなんかに出てきたのは覚えてる。

「どうしたの。なにか気になることもあった？」

じーっとその服を眺めていたら事情説明を終えたらしい泰祐が訊いてきた。

「あのさ、この服ってなんていうんだっけ？見たことあるんだけど名前が思い出せなくて」

あたしは服を指差しながら泰祐に言った。泰祐はああ、と納得した表情でなにやら頷きながら教えてくれた。

「それは狩衣って言って僕の仕事着みたいなものだよ」

「へえ…」

私は何となく気になって狩衣を見つめていた。その横でコホン、と小さな咳払いが聞こえた。そちらの方を向くと、葛葉さんがこちらに視線を向けていた。

「な、なんでしょうか？」

泰祐を吹き飛ばした時のイメージが頭をよぎり、一瞬自分もそうなるのではないかと危惧したがそれは杞憂に終わった。

「泰祐から事情は聞いたわ。そういう事情なら仕方がないからしばらくここにおいてあげる。というかそもそもあんたなんで泰祐を付け回してたわけ？ そんなことしなけりゃこんなことにならなかったのに」

葛葉さんは言い終えると深いため息をついた。どうやらご機嫌斜めらしい。あたしはあまり刺激しないように答えた。

「えっと…あたしは中学の時から泰祐の同級生で、中学の時から泰祐がいろんな幽霊騒ぎとかそういうものに異常に反応するからずっと怪しいって思ってた、今回女の人の幽霊が出るって言う話を聞いたとき泰祐なら何かわかるかなあ…って思ってた…それで今日偶然夜の学校に

入っていく泰祐を見て思わず後をつけちゃったんです。すみません

…」

「そう…そんな理由だったの。…今回は助かったから良かったものの、下手をすれば死んでいた…いえ、この場合は死ぬより辛いかもしれないわね。わかったらこれに懲りて泰祐の周りをうるちよるするのはやめなさい。次も助かるとは限らないのだから」

葛葉さんは有無を言わせない口調でぴしゃりと言った。あたしの反論は一切受け付けれないと言う雰囲気が漂っているのが感じ取れた。

「葛葉、もうちょっとやんわりと…こう、なんていうか棘のない言い方をできないかな」

泰祐が苦笑いを浮かべながら葛葉さんをたしなめる様に言った。
その瞬間に葛葉さんの視線が泰祐に向く。その動作は物凄く自然で、
また背筋を凍らせるものだった。これが流し目と言うものだろうか？
泰祐は葛葉の視線に一瞬怯んだ素振りを見せるがそのまま視線を
そらすことなく葛葉さんと向き合った。…顔は苦笑いのままで。

「それは構わないけどその分矛先はあんたに向かうけどそれでもいいの？これは元はと言えばあんたがしつかりしてないのが原因なんだからね。一通り武術は叩き込んだって言うのに気配の察知すら出来ないなんて教えた身のあたしとしては泣きたくなってくるよ」

そう言われると泰祐はバツが悪そうに顔を背けると人差し指でぽりぽりと頬をかいいた。

「叩き込まれても身に付くかどうかは別問題だと僕は思うけどね」

苦し紛れに泰祐はそう言い訳をするが葛葉さんにはそれは逆効果のようで、更に葛葉さんの顔が険しくなった。…泰祐って自分の首絞めるの好きね。あたしはもちろんそういう趣味はないけど。

「いや…ほら、人間て言うのは得手不得手があるもんだし、僕にとつて武術って言うのは不得手に属するっていうだけの話なんだけど…ごめん僕が悪かったから殴るのは勘弁してくれ」

…何だか泰祐の意外な一面を見れた気がするわ。何となく面白いかも。ていうか話がどんどんずれていつてあんまり進んでない気がするのは気のせいかしら？気のせいじゃないわよね。泰祐のヘタレっぷりが際立つような会話しかしてないし。

「いちいちうるさいわね。あんたがごちゃごちゃうるさいから話が進まないじゃないの。少しあんたは黙ってなさい」

そう言われて納得のいかないような表情をしながらも泰祐は素直に黙った。どうやら泰祐は葛葉さんに頭が上がらないようだった。

「じゃあ話を戻すけど、舞衣…っていったっけ？結論から言うとおんたはしばらくこの家に滞在してもらうわ。その間外出は一切禁止ね」

突然そんな事を言われてあたしはかなり戸惑った。話の流れが理解できない。どういった理由であたしはここに泊まらなくてはならないのだろうか？しかも外出禁止？それって事実上軟禁とかに近くない？

「えと…なんでここに滞在しなきゃいけないんでしょうか？あたし帰りたいんですけど…」

「どうなつてもいいなら帰ってもいいわよ。別に止めないし。ただ、ここから出ると間違いなくあんた紅葉に狙われるわよ。名前教えちゃってるんだし」

あたしは葛葉さんに言われたことの意味が分からず鸚鵡返しに聞き返した。

「名前教えちゃってるって…それが何か問題あるんですか？」

「大有りよ。いい？名前って言うのはね呪詛を行う上でとても重要なものなの。名前を知るってことは相手の命を握るも同然なのよ。名前って言うのは個人そのものを表すとても重要な記号なのよ。これがあるのとないのじゃ呪詛の効果が全然違うわ」

何だか説明してもらっても難しくて何が何だか分からない…あたしって馬鹿…。

「まあ要するに危ない目に遭いたくなければこの家に居ろってことだね」

泰祐がそう言って場をまとめたがはつきり言ってそんなことは分かりきってるのにとあたしは思った。

「さて、じゃあ難しい話も終わったことだし、夕飯にしようか」

そういつて泰祐は立ち上がり部屋を出た。あたしもそれに続いて部屋を出る。

その後の夕食の席で変なものをいっぱい見て気絶したことはあたしは忘れることにした。だって障子に目とかがあって怖かったし…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7921c/>

土御門君の除霊日記

2010年10月28日06時33分発行